

「糞の垂れた尻」と「お尻の割れた子供服」

— 過去の「蒙疆」から竹内好と高橋和巳の中国観をよむ —

楊 海英

雪子はひとしほ、貞之助夫婦に連れられて廿六日の夜行で上京することに極まってからは、その日々の過ぎて行くのが悲しまれた。それにどうしたことなのか数日前から腹工合が悪く、毎日五六回も下痢するので、ワカマツやアルシリン錠を飲んで見たが、余り利き目が現れず、下痢が止まらないうちに廿六日が来てしまった。……(中略)下痢はとう々その日も止まらず、汽車に乗ってからもまだ続いていた。

谷崎潤一郎著『細雪』(1939年、中央公論社)

一 モンゴル人から見た漢人の穴居と人豚同居

1844年初冬。カトリック教の神父ユックをはじめとするヨーロッパからの旅行家たちは、内モンゴルの中心都市フフホトの北西から黄河を渡って、オルドス高原に入ったところで、「洞窟」に住む漢人たちの集団を目撃した。ここは歴然たる「韃靼人」即ちモンゴル人の故郷でありながら、なぜ、漢人が進出しているのか、と一行は地元の「韃靼人」に尋ねた³³(ユック 1939:267-268)。

漢人は狡猾な奴等です。一寸見はいいが、長続きしない。数家族が私共の憫みを請うてやって来たのは二十年以上も前の事でした。連中は貧乏だったので、毎年取り入れが終わったら、この旗の^{タイヂ}台吉(貴族—楊)に少しばかり籐麦を納めるという条件で、付近の土地を耕すことを許されました。すると次第に他の家族もやって来て、矢張り住居する洞窟を掘りました。間もなく谷は連中で一杯になったのです。……平和は長く続きませんでした。連中は間もなく根性悪で、嘘で固めた地金を現したのです。与えられただけで満足せず、勝手に耕地を広げ、許しも得ないで広い土地を取ったのです。段々金持ちになると、税として払うことを承知した籐麦をよこさない。毎年、地代を請求に行くと、私は侮辱と悪口を加えられたのです。だが最も許し難いのは、この悪党の漢人が盗坊となって、谷の付近で道に迷った山羊や羊を一つ残ら自分のものにしてしまったのです。

これは、内モンゴルに山西や陝西からの漢人たちがどのように入植してきたかを非常に早い段階で第三者の視線でリアルに伝える資料である。最初は媚びるような笑顔か哀れな表情で遊牧民のモンゴル人の同情を引き出す。住み着いて強大になると、今度は受け入れたモンゴル人たちを貧困のどん底へと追い込む。このように定着した漢人たちと内モンゴルのモンゴル人たちは今日も隣りあって暮らす。そして、内モンゴルは 1930~40 年代の

³³ 以下、本論文において、直接引用する文章の旧仮名遣いを便宜上、すべて現行のものに変えていることを断っておきたい。

間は日本の殖民地となり、蒙疆と呼ばれた。

私は、内モンゴル自治区こと過去に「蒙疆」と呼ばれていたところの「韃靼人」である。私の故郷は内モンゴル自治区西部のオルドス高原で、古くからモンゴル人が暮らしてきた地域である。ところが、1949年に中華人民共和国が成立すると、隣接する陝西省から多数の中国人、つまり漢人たちが大挙して移り住んできた。物心がついたころには既にまわりに漢人たちの姿が見えた。しかし、今と違って、1980年代に人民公社が崩壊するまでは、漢人たちとモンゴル人は雑居ではなく、はっきりと棲み分けをしていた。

隣に住む漢人たちの生活は自分たちのとは根本的に異なるものだ、と内モンゴル自治区のモンゴル人たちはそう認識していた。普段は人民公社の仕事で一緒になることがあっても、互いの家に行って食事をしたり、寝泊りするようなことはあまりなかったのである。

文化大革命中の1969年夏のある夜、母と私はオルドス地域西部にある人民公社の本部で開かれた「政治学習会議」に参加した。昼間は各自の家で家畜の放牧をし、夜には全員が人民公社の本部に召集されるような毎日だった。「政治学習会議」の現場ではたいがい、当時、「民族分裂者」とされたモンゴル人が吊るしあげられて、中国共産党の幹部たちと漢人たちからのリンチを受けていた。そのような暴力的な会議に参加するのはとてもつらかった。それに、私の家から人民公社の本部所在地までは15キロもあった。乗る馬もなかったので、毎晩歩くしかなかった。深夜に会議が終わると、既に眠っていた5歳の私を母はおんぶするか、むりやりに起こして歩かせるかして、家路についていた。時折、キツネやフクロウなど、モンゴル人が不吉な生き物だと見る動物たちの鳴き声が聞こえてくると、母は私の手を握り締めて一段と急いでいたのを覚えている。

この時代を生きたモンゴル人たちは、「自分たちは中国の奴隷に過ぎない」、とと思っている人が多い(楊 2009)。内モンゴル自治区には当時150万人未満のモンゴル人が住んでいたが、そのうちの346,000人が逮捕され、少なくとも27,900人が殺害され、12万人が虐待されて身体に障害が残った、と記録されている(郝維民 1991:313)。モンゴル族全体が「民族分裂主義者」とされ、「偉大な祖国中国を分裂させようとしている」、との罪が冠されて粛清されていた時代である(楊 2009)。日常的にも非常に緊迫していたのを子供ながら私も経験していた。というのは、私の父親もそのような「祖国の分裂を企てた一員」とされていたからである。「反革命的」だとされた人々は容赦なく殺されていた。私の家も何回か政府に派遣された「革命的な群衆たち」に襲撃されたことがある(楊 2009)。モンゴル人たちが受難していたころ、漢族の人たちは以前よりも格段と意気揚々としていた。

ある晩、政治学習会議が終わってから、深夜の草原を急いでいた時に雷雨に襲われた。仕方なく母と私は草原を流れる河の近くに住む漢人の家に入った。優しく、貧しい漢人農家だった。もう遅いから、泊まっていけ、といわれたので、母は漢人一家に感謝の言葉を述べて朝まで雨宿りすることに決めた。この漢人一家は、河の北側の断崖に横穴を掘って棲家ユウトンにしていた。横穴は窖洞ユウトンといい、北部中国の黄土地帯に広く見られる住居である。

しかし、私は頑として泊まらずに帰ろうと主張した。雨の降った草原の芳香と乾燥した大地が放つ良い匂いがする屋外から何人も既にぐっすり寝ていた横穴の密室に入った時の臭気に耐えられなかった。その漢人の家のなかには豚も何匹か飼っていた。発酵した豚の餌の匂いも、小さい時からひたすら乳製品に慣れ親しんできた私には受け入れられるも

のではなかった。それに、与えられた布団には分厚い垢がついていて、真夜中のランタンの下で黒く光っていた。その晩、私は一睡もせず、ずっと泣きわめいていたのを今でも鮮明に覚えている。翌日家に帰ってからこっぴどく叱られた。私は漢人農民の家の中の匂いと彼らが話す言葉に生理的に拒否反応を示したのである。しかし、政治学習で疲れきった母親はすでに限界に達していたから、純朴な漢人農民の好意に甘えたのであろう。

モンゴル人も漢人も共に中華人民共和国の「人民」とされてから既に 60 年の歳月が過ぎた。それでも、草原のモンゴル人たちは今でも極力、漢人の家に泊まることを避けようとする。モンゴル人からすれば、家のなかに人豚が同居し、そして洗濯をほとんどしない陝西省北部の漢族の風習は、両民族の違いをもっとも顕著に示す指標だと見ているからであろう。

私はその後、1983 年から北京にある外国語大学に進み、日本語を学んだ。もっとも、私に日本語教育の「啓蒙」教育を施したのは漢人たちではなく、満洲国時代と蒙疆時代に日本型の近代教育を受けて育ったモンゴル人たちである。高校時代に三年間日本語を学習した私はそれなりに「間接的で、断絶的でもある日本的遺産」を背負って「偉大な祖国の首都北京」の外国語大学に「初めての少数民族出身の学生」として入学した。「文明の度合いが低い少数民族出身の者」が果たして「文明人」の言葉である中国語以外の外国語を学ぶ能力があるかどうかを試すために、私の入学が決定されたのである(『月刊 みんぱく』 1995)。

外国語大学日本語科の教師陣の大半は日本から中国に帰った「愛国華僑」であった。華僑と称しながらも、中国語がほとんど話せず、日本語が母語だった先生たちは口が酸っぱくなるほど漢族の女子学生たちに「説教」していた。

貴方たちはこれから日本からの外賓たちと接しますから、マナーが大事です。大股を開いて座っちゃいけません。暑い時でもスカートをめくって風を煽ってはだめです。

このように、華僑の先生たちは「女らしく振舞う」ことを四年間にわたって叩き込んでいた。こうした「説教」を男として、草原から「文明人」の世界に闖入したモンゴル人として聞きながら、私はいつも故郷の女性たちの姿勢を思い出していた。イスラーム教徒ではないが、人前に入る時は必ず頭巾をかぶって髪の毛を隠す。家の中では正座し、股を開くなんて、論外だった。たとえ、あらゆる風俗習慣が「封建社会の残滓」として完全に否定されていた文化大革命中でさえ、こうした作法はきちんと守られていた。

中国も解放前は良家の女性はきちんとしていた。何しろ纏足していたから。股を開くことはしなかったし、男より一歩下がって歩いていたものだ。

このように証言していたのは、上海東亜同文書院を出た日本人の先生だった。私は華僑の先生たちが忍耐強く女子学生にマナー講座を開いていたことにまったく理解がなかったので、別の日本人教師にことの真偽と意義を確かめた時の返事である。

1991 年冬に、私は陝西省北部の榆林地域で約 2 週間にわたって現地調査をおこなった。モンゴル社会を漢族側から相対的に見る為の行動だった。ある寒い夜、私が借りていた「北京ジープ」と称する車が故障したので、やむを得ず道路の近くに住む漢人農民に助けを求

めた。モンゴル族やカザフ族などユーラシアの遊牧社会には接待の伝統があり、ホスピタリティ精神が盛んなので、他人が困っているのを見かけると我先にと助け舟を出すし、自分の家に呼んで泊めるのが一般的である。旅人が泊まってくれることを遊牧民たちは一種の名誉だと認識する。私も彼らの一員であるし、そのような名誉ある行動を普遍的な価値観だと認識していた。

マイナス 30 度までに下がる厳寒のなかで私たちが車を修理していたのを見ている、陝西省北部の漢人農民たちはまったく動じなかった。わずか数十メートル近くの農家までトラクターで故障車を引っ張るよう頼んだところ、天文学的な数字の金を要求された。交渉に交渉を重ねてやっと農民の庭に車を入れて泊めてもらうことになった。感謝して窖洞^{ヨウトウ}のオンドルに横になった私はその晩、豚の餌を聞きながら 1969 年夏的一幕を懐かしく思い出した。翌朝も、人間の身体からの餌を待望していた子豚が陣取る柵の中で、噛まれるのではないかと悪戦苦闘した。そして、法外の宿泊金を支払わされた。カザフ族やモンゴル族の遊牧民社会で数カ月間居候しても、彼らから金を求められたことは一度もなかったのとは、天と地の差を感じさせられた。

「モンゴル人と漢人は違う」、とすべてのモンゴル人がそう認識している。その違いは無限にあるが、日々の行動パターンと価値観が異なっている、と総括するしかなかろう。では、日本の人たちは中国人こと漢人たちの行動をどのように眺めてきたのだろうか。私は戦時中に蒙疆こと内モンゴルを旅した竹内好と、戦後に北京と上海などを旅行した高橋和巳の文章からその見方の一端を抽出してみたい。

二 「糞の垂れた」尻一竹内好の蒙疆旅行

戦時中に財団法人・善隣協会が編集発行していた雑誌『蒙古』の昭和 17 年 8 月の第 9 巻第 8 号に竹内好の「蒙古の印象」という紀行文が載っている(竹内 1942:74-83)。後に著名な中国研究者にしてアジア主義者として知られるようになる竹内好のこの紀行文を読んで、私は強烈な共感を覚えた。竹内好が戦後に発表した膨大な数に上る中国論やアジア主義的思想論については、私はさほど渉猟していない。私は旧蒙疆出身のモンゴル人として、いわば、殖民地出身者として宗主国出身の日本人知識人の心象に共鳴している部分がある。それは、蒙疆こと内モンゴルに対する日本の政治的な思惑を完全に理解していることを意味するのではなく、蒙疆のもう一つの支配者、即ち中国あるいは中国人入植者に対してである。

蒙疆へ旅する前の「昭和十二年から十四年まで、僕は北京に住んでいた。柳の古木のあつ、院子の広い、南向の一棟を借りて、ぼんやり一人で暮らしていた」、と竹内は書き出す。そこへ、日本からひっきりなしに客人たちがやってきては、「蒙疆を指してまた旅立っていた。僕は駅まで見送り、それから自分の殻に引返した」。そして、客たちはしばらくすると帰ってきて、「包頭における黄河の景観がいかに雄渾である」とか、「蒙疆の指導者たちが、いかに新興の気に燃えているか」とか、「日焼けした顔を一層黒く輝かせて」語るのを竹内好は経験した。竹内も北京の院子にいながら、「当時の蒙疆には確かに、北支何するものぞ、わが理想こ々に在りという底の、気負った若々しい精神が感ぜられたのである」。時が経つにつれ、「現在、その理想が実現されなかったとしても、それは理想の罪ではないだ

ろう」、と竹内も時勢の変化に逆らえぬ思考を有していた。

そして、「今年(昭和 17 年—楊)の三月、僕は二年ぶりに支那へ渡り、はじめて蒙疆の地へも足を入れた」。「全世界が危機であると等しく、蒙疆もまた聞きである」、と竹内は心中を頭にしてしている。この前後の蒙疆の情勢といえば、「蒙古独立」を実現させようとしていた内モンゴルの指導者徳王(テムチュクドンロブ)が 1941 年 2 月に日本を再訪し、東条英機らに支援を訴えていた。8 月には蒙古連合自治政府を「蒙古自治邦」と呼ぼう、という極めて姑息な名称を駐蒙軍がモンゴル人に突きつける。「国」も「邦」もモンゴル語では「^{ウルクス}国家」を意味することから、モンゴル人たちは日本の提案を受け入れるが、蒙疆にいる漢人たちはそのやり方から日本側の政策の変化をみごとに看取していた(森 2000:174-176)。モンゴル人たちと日本の駐蒙軍、そして漢族との軋轢がさまざまな殖民地的危機を醸しだしていた。竹内好の蒙疆路は始まった。そして、自らの見聞と見解を一般読者向けに優しく諭える。

僕は鉄道の沿線を駆け足で廻っただけである。陰山も越えなければ、オルドスも踏まない。その都市も西北回教聯合部の支部の在る張家口、大同、厚和、包頭の四つしか知らない。四都市の印象だけが蒙疆旅行の全部である。……大同の町に一番感心した。厚和は全く失望した。張家口と包頭とは、失望も感心もしなかった。蒙疆の四都市を印象的に関西と皮革すると、張家口が大阪、厚和が京都、包頭が神戸、大同が奈良に当るような気がする。

蒙疆の四都市を関西の四都に比喻している書き方から、当時の日本人たちに遠く蒙疆の存在を一気に近づかせている。満蒙開拓移民団の多くが満洲こと内モンゴルの東に展開していたので、当然、開拓村落の現地情報も沢山伝えられていたが、西部の蒙疆は次なる天地だったのだろう。

竹内好はまず長城の町、張家口における日本の経営を目撃する。ここには後に西北研究所が置かれることになる。

蒙疆で、この街だけに建設が見られた。……小高い傾斜地に、総領事館を中央に据え、居留民団や蒙疆新聞社などの煉瓦建築が、荒涼たる砂漠の中に聳立している。周囲に完成した日本人の集団住宅が点在するが、まだ市街までは連なっていない。……

長城を北へくぐり出てから、まもなく内モンゴルの首都厚和ことフフホトに着く。

張家口に比べると、厚和の荒れ方はひどい。……支那内地なら、名も知らぬ県城にさえ、もっと立派なものがいくらかもある。そうだ、ここは長城の北であったと、はじめて僕は蒙疆の意味を理解した。……

表通りの日本人の店で空屋があるのも、ここではじめて見た。カフェー、料理店に類した店も二三あったが、夜闇けて人声も漏れなかった。二人いる宿の女中は、金土日だけにだけあるという日本の映画を見に行くために、代わりあって給仕に出た。

このように、竹内はフフホトに店を構えていた日本風の旅館に骨を休めた。彼は市内にある「厚和一高いという清真大寺の光塔に上がらせてもらって鳥瞰した。この眺望は雄大であった」。これは、ほとんど唯一とあっていいほど、竹内好の蒙疆旅行に見られた贅辞である。

竹内好は鉄道で厚和の西にある包頭まで行く。包頭から黄河を渡れば、オルドス高原になる。彼はここで足を止める。「包頭は、街そのものが場末の感じであった」、と切り捨てる。竹内は包頭で「この地に長く住みついて、地味な調査をしている学究」と「畳を敷いた薄暗い部屋で」対談し、「蒙疆経済の悲観的材料について糺した」。そして、彼は郊外に出て、黄土の高原に暮らす漢人たちを観察している。およそ 100 年前にヨーロッパの旅行家ユック神父らが出会った入植者たちの子孫である。

僕は包頭の街はずれで、どん底の穴居生活を見た。南向の崖に横穴を掘って、自然の黄土をそのまま壁として天上とした住宅が数軒連なっていた。……奥の部屋に、六畳ほどの広さの処に、十数人の人間の形をしたものが蠢いていた。みな骨と皮ばかりで、年齢の分からぬ表情をしている。ぼろと人間とが雑然と重なりあっている感じであった。壁の黄土の肌は、黒く脂じみていた。異様な臭気が立ちこめて長くは居られなかった(アンダーラインは楊)。

内モンゴルに侵入し、モンゴル人の故郷を占領しては鋤を草原に入れていた漢人たちの実態である。穴居という生活スタイル自体が竹内に「現実の中国の多様性」の一端を呈したにちがいない。「北支」の響洞と北京の院子の落差を認めなければならなかっただろう。そして、竹内は再び南下した。雲崗石窟で知られる大同に近づいた時である。

何処の駅からだったか、僕の隣席は、土地の農民と思われる貧しい身なりの夫婦と子供たちの一家族によって占領された。子供は、十ばかりの娘を頭に、乳呑子まで四人いる。座席は身動きもできないほど一杯になった。彼らの土と垢にまみれた、一度も洗濯したことのないような綿襖と肩を接していることは、僕には苦痛でなかった。多少の支那生活で慣れていた故もあるが、むしろ相手の貧しさを傷つけまいとする僕の弱気が、いつもこのような場合に働くのである。それに、珍しい生活も観察できるという好奇心も手伝っていた。……

下の二人の男の子は、珍しさにも飽いて、僕の膝によりかかって睡りはじめた。泥だらけの手でズボンを抱んでいる。無心な表情だが、僕はあまり愉快ではなかった。僕の好奇心と感傷とは、既にかかなり疲れを見せていた。後悔の気持ちも湧いてきた。だが僕は頑強に席を離れなかった。いま離れたのでは二重に錯誤を、犯すという妙な心理が作用していた。

竹内がどんな身なりだったかは分からない。「院子の広い、南向の一棟を借りて、空ばかり眺めていた」以上、裕福かつ清潔という近代化の諸要素を帯びていたことは容易に想像できる。彼は「苦痛でなかった」と「愉快ではなかった」という二重の心情で以て「蒙疆」

の漢人「土地の農民」と出会ったのである。この点は、モンゴル族と漢族の間で直接的な紛争が比較的になかった 1960 年代の私たちモンゴル人の心情に限りなく似ている。やがてドラマティックな展開を見せる。

僕は相手を呪いはじめた。臭気が、急に鼻を突いてきた。……その時である。頓狂な声を立てて、細君がいきなり赤ん坊の尻をまくった。抱きかかっていた布団に、赤ん坊が糞を垂れたのである。醜い細君の赤ら顔が、よけい醜くなった。四圍への顧慮よりは布団の処置が大事であると一瞬に思い決めたらしく、上の娘を手伝わせて、汚物の始末をはじめた。見ていると、小さな雑布のようなものを四五枚出し、ヘラのようなもので、布団と赤ん坊の尻から、汚物を削り取って雑布になすりつけている。うまい方法があるものだと思って僕は感心した。水を使わぬ生活には、それ相応の方便があるものである。多分あの布団はあのまま乾かしてしまうのだろう。思いがけない知識を得たことは嬉しかったが、この事件で、僕の神経はくたくたになってしまった。額に油汗が浮かんだ。何者かに呵責を受けている気がした。完全な敗北の意識が僕を支配した。

竹内好の筆致による下半身の排泄物のドラマは、「文」を漢字文明と儒教精神のエッセンスと見なす中国の読書人の「陽春白雪」の境域には絶対に現れない。従来から中華の知識人によって「下里巴人」という通俗世界のものとされてきた下半身と排泄行為の話は、近代文学をアジアで逸早く確立させた日本の近代知識人の作品に頻繁に出てくる。「清潔」がもし近代化の指標だったならば、「非衛生」的な身体はいわば前近代的で、未開のシンボルである、と誰でも容易に読み取れるメッセージである。

竹内好が出会った「貧農の一家は大同に近い寒村の駅へ降りていった」。後に彼が「多様なアジア」で以て日本の近代化について反省と批判の論を積極的に繰り広げていく際に、この蒙疆の旅の印象が如何に機能していたのだろうか。

三 「お尻の割れた特有の子供服」—高橋和巳の中国報告

もし、下半身とそれと連動する身体的な行為などが近代的な産物と指標であるとするならば、毛澤東によって「解放」され、西欧列強の圧制から「立ち上がった中国人民」のその実態をつぶさに観る必要が出てくる。「臭気」と「汚物」のような植民地支配下の貧困の象徴をきれいに除去した理想郷たる中国を日本に伝える必要が出てくる。

竹内好は戦後も中国研究に力を注ぎ続けた。「われわれの中国に関する知識は、断片的であり、いくつも断絶があり、おまけにイデオロギー過剰からくる偏見にみちている」とし、「中国の動きが、世界の動向を決定する重要なファクターである」とも指摘していた(竹内 1967:319)。ただし、竹内好の中国研究とアジアへの言及は、日本の近代化への反省であり、「間接的な日本論」であるともいわれている(土屋 2008:18-33)。こうした竹内流の「中国研究」あるいは「中国観察」の影響を強く受けていたのが、作家で中国文学者の高橋和巳である。高橋和巳は文化大革命が発動された翌年の 1967 年 4 月に『朝日新聞』社の特派員として中国を現地調査し、『新しき長城』と題するレポートを『朝日ジャーナル』に連載した。

高橋和巳一行は4月11日に羽田を発って、香港経由で広州、上海、南京、天津、そして北京という五大都市その周辺の施設と遺跡を参観して、26日に帰還している。香港から北上して深圳で中国入りした直後に、高橋の目に映った風景である(高橋 1967a:13)。

列車に乗るとすぐ、毛主席語録が各自にくばられ、いっせいに声をあわせて読む学習が始まるのだが、私の視線は、芭蕉をふくむさまじまの亜熱帯性の植物が茂り、クリークがひろがり、処々に水牛が寝そべり、扁平な麦藁帽の周囲に黒い布をたらしめた農婦がうすい紺の短衣に同色の褲子(ズボン)をはいて作業している田園風景にうばわれた。

中国に入るとすぐ「農婦の褲子」に視線を注いでいる。つづいて南京と上海での観察をもとに早速、「人々の魂に触れる」文化大革命の性質に言及している。

文化大革命は、単なる権力闘争であるだけでなく、また単なる思想整風運動であるだけでなく、単なる学生の正義運動であるだけでもない。たしかに革命を志向したものと思われる。政治の頂点と、一般大衆との奇妙な協力による前人未踏の第二革命—。

高橋に影響を与えたとされる竹内好は「継続される革命」の視点で文化大革命を理解していた(竹内 1967)。ある研究によると、「竹内は民衆の生活に視点を置き、文革を底流としての中国革命の一端と考えていた」という(土屋 2008:33)。となると、高橋和巳の第一報もこうした思考に依拠している傾向がよみとれる。

日本からの一行が天津の毛織工場を見学した後に高橋和巳は筆を執り、印象をつづった(高橋 1967b:95)。

……女性がすばすばと煙草を吸っている。女性が煙草を吸ってもどうということはないが、現在中国では、男性でも煙草を吸わぬ人が多く、街や公園を歩いていてもくわえ煙草などほとんどみかけず、自分の吸殻の捨て場所にこまるほど、道路は清潔である。

高橋は「この耳で聴き質問し筆記してきたことをもとに、文革の経緯をつづっている」。彼は「もっとも真なるもの」として「庶民の表情」に注目した。世界でもっとも「高い生活水準」に達しているにもかかわらず、「顔に陰険な皺を寄せ」ている日本の女性とちがう中国人女性を取り上げている(高橋 1967b:100)。

……中国人の表情は、私の目には及第に映った。服装はなお質素にすぎ、女性はたれ一人化粧もしていないが、しかし人々の表情はあかるく、態度はすばらしく立派であった。……ただし胡同の食堂で食事をしているときの女性の行儀はあまり感心しなかった。なにもおちょぼ口で澄ます必要はないが、ズボンを穿いているからといって、片足の足首を一方の膝に掛けて、大腿をひらかんでいいだろう。……食事と——もう一つの必要を満たす厠の解放性は、習慣としては私たちには異様であるが、夕闇の迫

る大自然の中、地面は昨夜の雨に泥濘と化してはいたが、空はおそろしく澄み渡っている春の微風の下、盛り盛りの農婦が、ぎょろっと目をむき、ぱくぱくと飯を食っているさまは、むしろ羨望にあたいした。泥をかためた囲いの中で黒い子豚がきゅきゅ鳴いており、藁葺屋根の向こうには疎な樹々の梢が揺れている。その戸外の食事は、まったく美味そうだった。習慣が異なり風俗が違い、相互の認識が不十分だから、ときには滑稽なすれちがいが起こることはある。

このように、高橋はあいかわらずどうしても異性たちに視線を浴びせ続けているようである。彼は時には「あまり感心」せずに、時には圧倒されながらも、風俗習慣のちがいとあたかも自分に言い聞かせているような印象である。

高橋はその後、「一部誤報された紅衛兵による破壊などはない」と伝え、「ほほえましい新旧共存もみられた」としながらも(高橋 1967c:78)、北京市内の景山公園の中のベンチで茫然と座り込んでいた、「知的専門作業を職とすると思われる中老の紳士」を描いている。「革命が闘争である以上、それを推進し慶賀する人々とともに、必ずしも十分に適応できず、論理と感情のずれに面伏せて悩む一群の人々がうみだされる」、と分析している(高橋 1967c:80)。高橋がこの文を書き上げた頃に、既に日本でも中央音楽院長の馬思聰の国外脱出が報道されていた、と本人も認めている。にもかかわらず、彼は事態の深刻さが読みきれなかった。たいていの人ならば、景山公園に「茫然と座り込む紳士」から、1966年8月に北京市内の太平湖に入水自殺した作家の老舎(傅光明 2007)を想像するはずであろう。日本では郭沫若の「自己批判」が大きく報道され(竹内 1966:12-18)、知識界に衝撃がもたらされていたことから考えると、老舎の自殺も重かったはずであるが、同じ作家としての高橋はその関連性への連想は途切れている。

1967年4月20日に北京市革命委員会が成立する前夜、「文化大革命の進行に一エポックを画するだろう日の前夜に」、一行は中国の首都に到着した。「銅鑼を鳴らし太鼓を打ちつつ、赤旗をなびかせてデモ隊が人民広場へ、さらに会場の北京工人体育館へと歩いていった」時、高橋は「半日、北京市を歩きまわっていた」(高橋 1967d:66-67)。

騒然たる雰囲気の中にも、道路で悠然と風をあげている人がいたり、お尻の割れた特有の子供服から尻をほうり出して走る子供を負う母親の変わらぬ日常が、かえって印象的だった。文化大革命は「銃を持った敵は滅びても、銃をもたぬ敵は存在しつづける」という認定にもとづく第二革命だが、基本的には〈文闘〉による革命であって、散髪屋にも風呂屋にも、変ることなく人々は日々の必要を果たしているのである。

たしかに日本の新聞にも報ぜられたように、かつては上海や広州で、最近は四川省の各市で、奪権の瀬戸際で相当規模の〈武闘〉は起こったろう。私自身、小規模な武闘の訴えながら、壁新聞でそれを見たり、写しとってきいた。傷ついた者の顔写真や破壊された器物、証拠の棍棒や革帯などの凶器の写真、あるいは激しい責任追及や糾弾文、解放軍を非難することは許さぬといった布告など。

だが、それは貼紙の隙間をくぐって家に入出入りするように見えるほど街全体を覆った、何万、何十万枚の壁新聞の中の僅かな部分にすぎぬことも、この目で確かめてきた。写しとってきいた武闘の記事だけを並べれば、中国は内戦寸前という印象を与える

かもしれない。

そもそも高橋和巳氏を中国に派遣した『朝日ジャーナル』側には、はっきりした目的があった。連載が始まった時の編集者の言葉は次のようになっている。「中国の文化大革命は“武闘”の様相すら見せはじめ、新展開を示している。……(中略)作家で中国文学者の高梁和巳氏を中国に特派して、文革に煮えたぎる中国の実情を報告してもらった」。しかし、ここに至って、「高橋をして中国古典文学に対する敬意は現代に生きる人民に対する敬意へと変化したと言わしめるような感銘に浸った」(馬場 2008:132)。高橋は新聞社側の狙いをみごとに裏切った、と土屋も指摘している(土屋 2008:22)。高橋に影響を与えた竹内好は文革「不可知論」を掲げながらも、少なくとも「心情的には文革に傾斜していたことは、その行文から容易に感得せられる」人物だった(馬場 2008:132-133)。高橋も文化大革命を「第二の革命」だと認識した場合に、それに伴って発生するあらゆる暴力も結局は「僅かな部分にすぎぬ」として片付けられてしまった。彼は意図的に「内戦寸前の中国」を描かずに、専ら「感心しない」漢人女性の開かれた「大股」と「お尻の割れた特有の子供服」から「ほうり出」た尻に墨の汁を注いだとしか思えない。かつて、竹内好は「糞の垂れた尻」を描写してシナと日本との異なる身体論を突出させようとした意図とまったく逆に、あくまでも「文」としての「革命」を日本に伝えたかったのであろう。それは、ある意味では竹内好の「愉快ではなかった」「苦痛」と「二重の錯誤」を払拭し、贖罪の念をこめた「報告」であったかもしれない。

竹内好にとっても、高橋和巳にとっても、隣の席の客に遠慮せずに排泄物を処理する「前近代的な支那人」女性と、すばすばと煙草を吸い、大股を開き、「ぎょろっとした目」で大地に立って飯を食う女性は、やはり日本では日常に見られない行動様式だった。日常における人間の身体的な行為の差は民族や集団の歴史に基づいて創出されたもので、各々異なるのは当然の文化的・思想的結果である(野村 1996)。竹内好が体験したのは、植民地統治下の蒙疆での「支那人」貧農一家の姿で、高橋和巳は似たような光景を「人間の解放」が実現され、共産主義に入る前段階の社会主義中国から発見している。毛沢東の言葉を拝借するならば、「立ち上がった中国人」にあたる。北京市内の子供が「尻の割れた子供服」を穿いて走っていた頃に、かつて竹内好が観光した大同の貧農たちが完全に「どん底の穴居生活」から飛躍して豊かになっていたとも思えない。それでも、高橋はつとめて「立ち上がった」、「解放された中国人民」を描きたかった。その「真なる姿」がもし「内股」で歩く女性と、「割れ目」が縫い合わされていたら、むしろ植民地統治が続いていたことになりかねないので、あえて変らぬ情景に拘ったのであろう。

近代日本の著名な探検家の一人である河口慧海もまたその著作『西藏旅行記』のなかでチベット人たちの陋習を大々的に描き、かつ愚民視していた。河口慧海の評伝を書いた奥山は次のように分析している。「文明開化の時代に人となった慧海にとって、文明(西洋近代文明)とはよきものであった。彼は、今日の日本人のようにチベット人社会の前近代性に「郷愁」を感じたりはしていない。同時代に生きた多くの知識人と同じく、彼もまた進歩主義者であり、社会は野蛮から半開、半開から文明へと進歩するものと考えていた」(奥山 2009:210)。下半身の行為と陋習等がもし、日本の植民地支配下の民の「野蛮」ないしは「半開」のシンボルだったならば、社会主義制度の確立にともなって「文明開化」した「人民」

の清潔な「割れたお尻」を創出することで、「郷愁」を払拭して贖罪したかったかもしれない。

参考文献

エル・エ・ユック

1939 『韃靼・西藏・支那旅行記』(上巻、後藤富男訳)生活社。

奥山直司

2009 『評伝 河口慧海』中央公論。

郝維民(主編)

1991 『内蒙古自治区史』内蒙古大学出版社。

竹内実

1966 「郭沫若の自己批判と文化革命」『朝日ジャーナル』Vol.8, No.21,p12-18。

竹内好

1942 「蒙疆の印象」『蒙古』Vol.9, No.8,p74-83。

1967 「編集をおえて」竹内好・野村浩一編『講座 中国 革命と伝統』筑摩書房。

高橋和巳

1967a 「中国報告 新しき長城(上)—文化大革命のなかの解放軍」『朝日ジャーナル』Vol.9, No.21,p12-17。

1967b 「中国報告 新しき長城(中)—上海の時計工場での見聞」『朝日ジャーナル』Vol.9, No.22,p95-100。

1967c 「中国報告 新しき長城(下の1)—激しくすすむ文化の奪権闘争」『朝日ジャーナル』Vol.9, No.23,p76-81。

1967d 「中国報告 新しき長城(下の2)—菩薩信心から毛沢東崇拜へ」『朝日ジャーナル』Vol.9, No.25,p66-71。

谷崎潤一郎

1939 『細雪』中央公論社。

土屋昌明

2008 「竹内好と文化大革命—映画『夜明けの国』をめぐって」『専修大学社会科学研究所月報』539,p18-35。

野村雅一

1996 『身ぶりとしぐさの人類学』中央公論社。

馬場公彦

2008 「文化大革命在日本(上篇)」『アジア太平洋討究』10,p109-139。

傅光明

2007 『口述歴史下的老舍之死』山東画報出版社。

森久男

2000 『徳王の研究』創土社。

「モンゴル族青年、民族学をこころざす」(みんぱく・インタビュー)『月刊 みんぱく』12月号, 1995年。